さざなみ国語教室
第491号　2023年2月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

育てるということ

尾崎順子

兵庫の山間地で野菜作りを始めて五年たつ。この五年を通して最も感動したのは、根深葱の育て方だった。

寒い季節の名脇役となる根深葱は、一年で最も暑い七月下旬に畑に苗を植えていく。この時一度水やりをするのだが、後は決して水をやらない。土がカラカラに乾いてもう駄目だと思った時に少しだけ水をやってもいいと近所の人は教えてくれたのだが、細くてひょろひょろしている苗が、今年のあのカンカン照りの日差しの中で健気に立っているのを見ると、つい水をやりたくなってしまう。隣の里芋は溢れるほど水をもらっているというのに、葱は一滴の水さえもらえない。何と理不尽な！そう思っていた。

それだけではない。寒さに弱い里芋は、霜が降りる前に茎と葉を切り、土を深く掘って植え直す。その上に籾殻をかぶせ、土でしっかり覆い、至れり尽くせりの寒さ対策をしてやるのだ。一方、葱はというと、一カ月に一度土寄せをして追肥するだけで、十二月にはもうそのまま畑に放っておく。年末の大雪の時は、何日も雪にすっぽり埋もれて、葉が凍ってしまっていた。この違いは何なんだ！

私は葱に大いに同情した。

ところが、一月に抜いて食べてみてびっくりした。とてもおいしい。葉の白い部分は太くてかたいのに、中は甘くて柔らかい。理不尽だと思っていた育て方が、実は葱には最高の環境だったのか。

この辺りの葱は岩津葱と呼ばれ、店に置かれれば他の根深葱よりずっと高い値がつく。熊谷市に負けないほどの夏の暑さ、山陰特有の冬の寒さ。自然の厳しさが葱のうまみを引き出していると地元の人は言うが、なるほど、そうであったのか。

つくづく植物の持つ力は計り知れないと思う。人間の子どもと同じように、それぞれの個性にあった育て方というものがあるのだろう。どうやら私の同情は、いらぬお節介だったようだ。

ともあれ、収穫の日を思い描きながら作物を育てる日々は楽しい。

指をもて選(すぐ)りたる種子
十万粒芽ばえれば声をあげて
妻呼ぶ　時田則雄　『北方論』

北海道の農民歌人、時田則雄の歌である。この種が何であってもかまわない。育てることの喜びはもうこの時から始まっている。

（元宝塚市立売布小学校教諭）

さざなみ

▼日本学生科学賞の中央審査において環境大臣賞を澤田君（高島市今津中2年）が受賞したことを読売新聞で知った。受賞の対象になったのは「石田川の大冒険パート3」。記事によると、自宅近くの石田川を7月から12月に調査をした。計1600個の川底の石を対象に、場所ごとに重さや大きさ、傾きや並び方を記録した。その上で、川の直線とカーブを再現した発泡スチロール製の模型を自作して実験を繰り返した。中央審査では、「圧倒的なデータ量で説得力を持たせて論じている」と地道な努力を評価された▼研究の動機は小学校5年の時の授業で「川のカーブ部分の内側は浅くて小さな石がある」と習った記憶から「本当にそうか、理屈を確かめたい」ということからだったという。小学校理科の授業で習ったということが見事に実ったことを知り、笑顔の澤田君に癒された朝のひと時だった▼この嬉しいニュースには、自然の不思議さを伝えた小学校の理科の先生、研究の成果を評価して中央審査に応募された中学校の先生。そして、研究過程で応援されたであろう家族の人、友人の応援があったであろうと想像しながら繰り返し読んだ▼印象に残った言葉は、「小学5年の理科の時の授業」ということ。日々当たり前に思っている授業の大事さを改めて感じた新聞記事であった。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

だいじょうぶ

弓削　裕之

音楽会が終わった。二年生にとって音楽は初めての、大きなホールでの音楽会だった。がんばったごほうびに、昔遊びの時間をとった。「羽子板や凧揚げなどをして遊んだ。竹馬やコマ回し、竹馬をしたり、最後まで丁寧さに、活動が終わり、後片付けをする時に、クラスの「体育準備係」の子たちにお手伝いをお願いした。コマの板を運んだり、整えたりするなど、最後まで丁寧さに、係の子が、「だいじょうぶ。寒かったね。」と言ってくれた。準備係の子たちが教室に帰ってきた時、あたたかい言葉をかけた。そのあと、教室全体がなごやかな雰囲気になった。

クラスで「だいじょうぶ」という言葉を耳にするのは、どんな時だろうと考えた。けんかしたり、落ち込んでいる子、泣いている子、体調が悪い子。友だちの様子がつもと違うこと、敏感な子どもたちは、すぐにその子のもとに寄ってきて、顔をのぞきこんで、「だいじょうぶ」と声をかけている。幼稚園や保育園でも、きっと同じように子どもたちの中に、自然と根付いた言葉だったのかもしれない。初めは、いろいろな言葉のようにに感じる。

音楽会でも「だいじょうぶ」の支えがあったことが、子どもたちの日記から分かった。

わたしは音楽会のホールについたとたん、心ぞうがバクバクとなってきていました。歌のじゅんびができてわいてる時、はく手がホールにひびいてドキッとしました。合そうの時に音楽のリズムがずれたと思ったら、お母さんが「だいじょうぶだったよ」と言ってくれました。

リズムがそろわないことは、練習の時から課題になっていた。本人の中で、（うまくいかなかった）という思いがあったのかもしれない。それを口にした時、おうちの人から「だいじょうぶ」と言ってもらえた時の安心感が伝わってくる。

さいしょは、きんちょうしていたけれど、歌、合そうを見ていたら、がんばるぞという気持ちが高くなりました。けれど、やっぱりきんちょうして、私たちの合そうの時、さいしょに「レ―」と音を出してしまいました。だいじょうぶかなと思ったけれど、他は、しっかりれんしゅうのせいかが出て、しっかりできました。少し、はずかしいと思いました。けれど、お友だちに言ったら、「そんなの、一、二年たったらわすれるから、だいじょうぶ。」と言っていたので、そうだよねと思いました。（中略）何年生になっても、京都コンサートホールに行って、しっぱいしても、だいじょうぶと心の中で言い、がんばりたいなと思いました。

いつもの練習では失敗のなかった子だ。自信を失いそうになったところに、友だちからの「だいじょうぶ」をもらった。それが大切な言葉となり、次に向かう勇気がわいた。

あと一か月で二年生が終わる。「みんなのなら、だいじょうぶ」と、子どもたちの背中を押してあげたい。

（京都女子大学附属小学校）

漢字学習における自由進度学習

高木　富也

「漢字学習がマンネリ化している。」二学期後半に、子どもも自分自身も感じたことである。四月から取り入れた漢字学習システムもしっかりこなし、漢字五十問テストの学級平均点は九十点を越え、自主学習等で漢字練習に取り組む子どもたち。漢字学習の協働学習化もできている。ただ、新しい方法も日常化した頃、こなすだけの漢字学習になってきたように感じた。「三学期から、漢字学習はみんなに任せてもいいかな？」思い切って児童に問いかけてみた。「いいよ。自分でできるもん。」案外反応は悪くなかった。

三学期、最後のレベルアップとして漢字学習における自由進度学習が始まった。導入にあたり、改めてなぜ漢字学習をするのかを確認した（粘り強さ、自主性、計画性、丁寧さ）。次に、「読み優先」が重要であること、基本的にこれまで身につけてきた漢字の習慣や、学習システムは変わらないことで安心感を持たせた（読み、音訓、文章、述語、書き順、部首、指書き、空書き等）。唯一変わることが、自由進度だということを伝えた。

具体的な方法は、朝学習や国語の授業時間に、十分間のモジュール的な枠を設定し、初めに速読で読みだけを確認する。その後は自由進度。ドリルの反復練習をしてもいいし、ドリルノートを進めてもいいし、自主学習に取り組んでもいいし、国語辞典やiPadの辞書アプリを活用してもいいし、困ったことがあれば友だちと相談してもいい。テストや自習課題が終わった後に時間が余っていれば、漢字をしてもいい。一日何個進めても構わない。最終的な締め切り日だけ決めて、できた子から提出する。

子どもたちの反応は、非常に良かった。「自分で決めて進められるから嬉しい。」「土日は習い事で忙しいから、それまでに終わらせたい。」「先生に教わらなくてもできたから自信がついた。」などの好反応だった。懸念点は、家庭学習の環境が身についていない児童、漢字が極端に苦手な児童への配慮だったが、中間締め切り日を設定することで対応できた。全体指導時間が減った分、より支援が必要な児童に関わる機会が増えた。個別面談で進行具合を相談、計画の修正などをしたことで、三学期の漢字三十六文字を二週間で全員合格することができた。

漢字小テストの平均点は、二学期の頃と変わらない。抜き打ちで空書きなどをしても、書き順なども理解している様子である。自由進度学習によって、自主性、計画性、学びへの意欲が高まり、漢字も覚えられるならば、理想的である。三月上旬、三年生最後の漢字50問テストを実施する。結果がどうであれ、新たなチャレンジをした児童を認めてあげたい。

（東近江市立能登川南小学校）

「言葉のイメージをもとに読む」

少徳　信

学級で、「大造じいさんとガン」の学習に取り組んだ。詳しい単元計画や単元を通した授業の実際等は割愛するが、ここでは授業の一部分を紹介したい。

クライマックスの場面を読む中で、ある子が「羽が、白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました。」の言葉について疑問を出してきた。聞けば、「戦いのシーンにも関わらず、言葉がきれいすぎるのはどうしてか」とのこと。周りの子も、確かに白い花弁のようにって特別な感じがあると反応する。一方で、「特別な感じはわかるけど、自分としては、（作者には）もっとかっこいい表現があっただろうから、そっちを使ったほうがよかったと思う。」という子も出てきた。そんな中、また別の子が「作者的にはどう思ってるんかな」と、作者の思いを読み取ろうとし始めた。そこで、作者である椋鳩十はなぜこのシーンでこの言葉を選択したのかについて話し合うことになった。議論が進む中で、子どもたちから「白ってすごく明るくてきれいな感じがあるから、戦いのどろどろした、怖い感じを書きたかったんじゃないと思う。」「それわかる！普通に見たらただの羽なんやろうけど、それを花弁としたのは、やっぱりきれいなシーンなんよな。」「すんだ空にってところもあるから余計きれいな感じが増すよな。」「作者は自分で物語を書いているんだけど、自分（作者本人）も残雪の姿がきれいって感じたから、（結果として）そんな表現になったんだと思う。」など、言葉のイメージを豊かにとらえていると考えられる意見が多く出てきた。振り返りでも、言葉のイメージをもとに自分の考えを書いている子がとても多くいて、自分の事前の予想を超えて読み深めていった子どもたちに驚いた。

授業後、何人かの子とよくそれだけ考えられたねなどと話していたら、「だって前、似たようなこと考えたことあったやん」といった旨のことを口々に返してきた。そんなんあったかなと思ってくわしく聞いてみると、どうやら以前季語の学習をした際に、「意味も知ったうえで、そのイメージを感じることが大事だよ」と話したことや、句会で色のイメージや季語のイメージを想像した経験と結びついたらしい。過去の経験をピックアップして新しい学びに生かすことができたことについても、また嬉しくなった。

今までの機関誌に載せていただいた拙稿と大いに重なる部分はあるのだが、改めて言葉を意味とイメージでとらえることの大切さを子どもたちの姿から学ばせてもらった。言葉を意味のみでとらえると頭にしか残らないが、イメージを添えると心に残る。授業において描写から残雪の生き方について深めきれなかったことは残念ではあったが、子どもたちの心に言葉が残ったのなら、とても嬉しく思う。

（彦根市立河瀬小学校）

説明的文章を整理しながら読む力を育成するために

谷口映介

学習名「家のつくりの工夫を見つけて、紹介カードにまとめよう」（「人をつつむ形―世界の家めぐり」東京書籍三年下）での実践を報告する。本学習では、筆者の考えと理由や事例との関係に気をつけながら、筆者のものの見方や考え方を捉えて読む姿を目指した。手立ては主に次の三点である。

一．既有の知識とのズレによる学習課題作り

本教材は、世界各地の家のつくりを取り上げており、その土地の人々が手に入れられる材料を用いて、土地の特徴や人々の暮らしに合わせて造られた家が紹介されている。まずは、教材と出会う前に、十分に興味付けを図りたいと考え、扉の写真や、筆者の家の写真集から、自分のイメージする家との違いを比べることにした。学習者からは、「窓も扉もない。風がよく通るね。」（つくりの違い）「これだと、雨や風が入りやすいけれど、雨はあまり降らないのかな。」（土地の特徴）などの疑問や気付きが出された。ここから、①世界の家は、どんなつくりなのだろう。②筆者は、文章でどんなことを伝えたいのだろう。という全体を貫く「問い」を生み出すことができた。

二．色分けから、表や文への整理

筆者の考えを読む際に、いきなり表に整理するのではなく、筆者のものの見方（【筆者の目のつけどころ】）を見つけ出す活動を取り入れた。学習者は、全文を一枚にまとめたシートを用いて、文章から読む観点を見つけ出し、色分けをしながら表に整理していった。

【筆者の目のつけどころ】
黄色：土地の特徴（気温・自然・天気）
水色：人々のくらし（生活・仕事）
緑色：地元にある材料（土地で手に入るもの・とれるもの）
赤色：つくりの工夫（よいアイデア）

三．表にまとめた情報を文章化

次に、理由を表す言葉を用いて、家の作りのくふうについて、文章に書き表した。教科書にある文章でまとめた後は、「キッズペディア世界遺産」（小学館．2021）を用いて、白川郷の家のつくりの工夫を表や文章に自力でまとめる活動を設定した。学習者は、表に整理した情報を関係付けて、複数の文に書き表すことができた。

白川郷は、雪の多い地いきにあるので、屋根のかたむきを大きくしています。そうすることで、雪がすべり落ちやすくなります。また、山あいのせまい土地にあるので、二階から四階をうまく利用して、かいこを育てて生活しています。

今後も、情報を整理し、文章を正確に読む力を高めていきたい。

（竜王町立竜王小学校）

子どもの輝き
第４回近江の子ども俳句教室
好光幹雄

主催ＮｐＯ法人現代の教育問題研究所（理事長 吉永幸司）

滋賀県知事賞（以下、学校名略）

チューリップかなしい時も赤が好き　五年 北川遙愛

滋賀県教育長賞

ひなまつり十二ひとえをきてみたい　二年 葛山日向花

大津市長賞

ランドセルこっそりカイロ母の愛　四年 上嶋杜和

大津市教育長賞

手の上でトランポリンする焼きいもが　五年 土田絢葉

草津市長賞

夏の夜青をわけ合う空と海　五年 松野陽向

草津市教育長賞

あざやかに炎天切りさきホームラン　五年 上宮光陽

草津俳句連盟会長賞

はれたそらげんきになわとび木よう日　一年 髙橋真子

朝日新聞大津総局長賞

ゴーグルの日焼けのあとがちょうみたい　五年 野波桃季

毎日新聞大津支局長賞

セミをとりそれをにがした青い空　五年 緒方大貴

読売新聞大津支局長賞

母はおにまめまきしてよお父さん　二年 水谷優希

中日新聞社賞

すいとったトマトの元気雑草め　六年 安原ウメ

産経新聞大津支局長賞

やえざくら太陽あびてわらってる　二年 仲地心菜

エフエム滋賀賞

大文字いつもおくり火ありがとう　一年 石橋空明

ＦＭおおつ賞

朝一おきて日野菜つけものまっている　三年 隅 湖春

えふえむ草津賞

風邪ひくで聞き飽きましたお母さん　中学三年 松川さくら

ＮｐＯ現代の教育問題研究所賞

赤ちゃんの泣き声きいてさくらさく　五年 三上哲平

弟がはいはいできた秋の夜　四年 三上和奏

おいもほり六人家族見つけたよ　六年 米津桃子

おにごっこ先に友追う白い息　四年 田仲那帆

なつぐもやはたけかけまわるぼくとカエル　一年 浮村聡一

ふゆがきたつめたいゆきがやわらかい　一年 松本一輝

おとうとがはじめてきたよ入学式　三年 小﨑恭弥

新米で笑顔あふれる家の中　五年 箕輪葵琉

ころころとおおきくなるよ雪だるま　四年 髙橋 蓮

とどいたよじいちゃんからのさつまいも　四年 中西桃花

ぎんいろのさんま輝く三日月だ　四年 土井美緒奈

この度、全国から数千句の応募がありました。その中から選りすぐりの二十六句をご紹介しました。子どもにしか詠めない瑞々しい感性の句に感動しました。

さて、子ども時代は、単に大人になるための準備期間ではありません。子ども時代を子どもらしく豊かに生きることこそが、感性豊かな人間性を培い、共感性に満ちた思慮深く逞しく心豊かに生きる人間性を育成するのだと思います。子ども時代はそういう意味で、今しかできない体験と冒険と自己表現が出来る貴重な時期です。上手な俳句を詠むことが目的ではありません。子どもたちが伸び伸びと自己表現し自尊感情を高め、人としての逞しい根っこを伸ばしてくれること願って止みません。

最後になりましたが、滋賀県知事三日月大造様はじめ、ご後援を頂きました関係各者の皆様、学校関係者、保護者、そして実行委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。尚、ホームページにて作品集を掲載予定。えふえむ草津７８・５ＭＨｚ「俳句五・七・Ｇｏの時間」（オンデマンド）もどうぞ。次回もまたご支援、ご応募のほど宜しくお願いいたします。

水仙花の明日を信じる真白かな　幹雄

（近江の子ども俳句教室　実行委員長）

編集後記

▼一月例会（四九〇回）は、第４回「近江の子ども俳句教室」（投句部門）の応募作品の選考会。及び、応募作品をもとにして、子ども俳句の読み方、味わいかた、指導の仕方・評語の書き方について研究を深めることでした。選考について予定通りに行かしかし、評語を含めて子ども俳句研究に つい公は、滋賀県下の大雪警報、及び共交通機関の計画運休の止まりました。▼「子どもの俳句」の投句部門はすでに３回を開催しました。次の作品は過去の作品集からの引用です。（優秀作品の一部）「第１回」きものきてモデル気分の七五三（山下さん・小１）さんぽ道コスモス見つけたお（小島さん・小２）だちこまでとばすかきょうそうたこ上げも（志村さん・小３）うちの犬初めての冬こせるかな（綿田さん・小５）「第２回」赤ちゃんが生まれてくるよ夏の空（山元さん・小４）あかとんぼそらにさいてるはなのよう（水谷さん・小１）目かくしで右に左にスイカ割る（荒川さん・小６）絵日記に大きくつスイカの実（久米・中３）「第３回」弟がグーでもみじに負けた（新井さん・小６）カレーダー残り一枚冬近し（小林さん・６年）稲の穂や風歌うたび金メダル（境さん・６年）どんぐりをふくろいっぱいひろったひと（玉本さん・幼年中）これらの作品を含めて入選作品及作品の評語は「現代の教育問題研究所」のＨＰ（https://kyoiku-npo.com/index.html）に掲載しています。▼巻頭には、尾崎順子先生から、玉稿を頂きました。深謝。（吉永幸司）